



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「分身」について
Author(s)	松井, 茂雄; Matsui, Shigeo
Citation	スラヴ研究, 2, 83-103
Issue Date	1958
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4932
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112999.pdf



О «Двойнике»

С. Мацуи

Мировая слава Достоевского, выдающегося художника слова, прежде всего определилась большими социально-философскими его романами, и потому исследовательские работы по творчеству писателя почти исключительно посвящены этим романам, между тем как произведения молодого Достоевского, в том числе и «Двойник», до сих пор не так тщательно изучены.

Хотя в его второй повести «Двойник», бесспорно, имеется художественная слабость, но в её идейном содержании заключена изумительная оригинальность. Известно, Достоевский позднее развертывал свою мысль о раздвоенности человеческой природы — о неизбежном сосуществовании добра и зла в душе человека, как главном свойстве человеческой природы — и считал душу человека полем битвы между «идеалом Мадонны» и «идеалом Содомским». По мере того, как такая мысль впервые ясно проведена в «Двойнике», тщательное изучение «Двойника» имеет важное значение для правильного понимания творчества писателя.

В настоящей статье, следя по возможности тщательно за процессом раздвоения личности героя, автор пытался рассматривать его характер, потом социальное его положение в окружающей действительности, и наконец внутренний мир самого героя. Из этого можно вывести, что, во-первых, каждый из этих трех моментов заключает в себе глубокую противоречивость, во-вторых, переплетением именно этих моментов обуславливаются и необходимость появления второго Голядкина — «ALTER EGO» героя — и соотношение между его «Я» и его «другим я».

В настоящей статье разъяснение вышеизложенной задачи основано главным образом на рассмотрении самой повести «Двойник», но, вместе с тем, автор старался использовать как можно больше статей и материалов об этой повести, которых, впрочем, до сих пор выпущено в свет сравнительно мало.

《分身》について

松井茂雄

- I. 序論
 - II. 主人公の性格
 - III. 主人公をとりまく外的世界
 - IV. 主人公の内面的世界
- むすび

I. 序論

ドストエフスキー (Федор Михайлович Достоевский, 1821-1881) の第二作《分身》

ゴリヤートキン氏の冒険》(«Двойник. Приключения господина Голядкина»)は、1846年の《祖国の記録》第2号(«Отечественные записки», 1846, No. 2.)に発表された。この「将来恐るべき役割を演ずる」¹⁾作品が、処女作《貧しき人々》(«Бедные люди»)と踵を接して²⁾世に出た2月1日に、ドストエフスキーは兄ミハイル(Михаил Михайлович Достоевский, 1820-1864)に宛てて、「ゴリヤートキンは、《貧しき人々》より10倍もすぐれています。仲間の者達は、《死せる魂》以後ロシアでこのようなものは一つも現われなかった。これは天才的な作品だ、と云っています、彼等の云っていることは、まだまだこれどころじゃありません！彼等は皆どのような希望を抱いて僕を眺めていることでしょう！本当にゴリヤートキンはこの上なく成功しました。」³⁾と報じている。然し、2ヶ月後に彼は、「僕は期待を裏切って、偉大な作品となり得るものを駄目にしてしまいました。」⁴⁾(傍点筆者)と告白し、自ら《分身》の失敗作であることを認めている。異状なセンセーションを捲き起した《貧しき人々》の作者の第二作として、特に大きな関心を寄せていた文壇全体の声は、「ゴリヤートキンは実に退屈で、だらけていて、とても読んではいられない程冗漫だ」⁵⁾という点で一致していた。

では、《分身》を失敗作、研究に価しない作品として無視すべきであろうか？ E. H. カー(Edward Hallett Carr, 1892-)は、「もしドストエフスキーが1849年に処刑台上で死ぬか、後にシベリアで死んだならば、《貧しい人々》は同じ時代の別の小説グリゴロヴィチの《アントン・ゴレムイカ》と同じような運命を辿ったであろう。それは半ば忘れられた古典となり、学校で読まれ、ロシア文学の教科書に敬意をもって名の掲げられる程度のもとなったであろう。この時期のその他の小説はまったく忘れられてしまうだろう。そこには現代の読者を引きつけるものがまるでない。」⁶⁾と語り、ドストエフスキーの初期の作品中最もすぐれた《貧しき人々》さえ文学的に高く評価せず、わずかにその文学史的価値を認めているに過ぎない。然し、カーは更に続けて、「だが、文学の研究家は、これらの小説にもっと強い関心をむけるであろう。それはドストエフスキーの後の小説にある特徴を示し、それを説明するに役立つからで、これによらなければ後期の特徴の説明は困難である。」⁷⁾と述べている。カーが正しく指摘しているように、ドストエフスキーの初期の作品が文学的価値に乏しいとしても、後期の作品の創作ノートの存在としての重大な価値を見逃すわけにはゆかない、特にこのことは小説《分身》について云い得るであろう。

まず、ドストエフスキーが、この作品をどのように見ていたかについて観察しよう。先ほども述べたように、彼はその失敗作であることを認めながらも、尚「偉大な作品となり得るもの」と称し、シベリヤ流刑から帰って間もなく、「僕はなぜあの素晴らしい想をふい

1) Письма I, под ред. А. С. Долинина, М.-Л., 1928, (以下単に Письма と記す), стр. 108, Брату, 1847, январь-февраль.

2) 《貧しき人々》がのったネクラソフの《ペテルブルグ文集》は、1846年1月15日に出た。

3) Письма, стр. 87.

4) Письма, стр. 89.

5) Письма, стр. 88.

6) E. H. Carr, «Достоевский», 中橋・松村共訳, 社会思想研究会出版部, 昭和27年, 62-63頁.

7) 同書, 63頁.

《分身》について

にしなければならないのでしょう。あれは社会的な重要性からいって非常にすぐれた典型で、僕が最初に発見し、宣言したものです。」¹⁾と自負し、更に死の4年前には、「この小説は全く失敗してしまった、然しその着想は十分輝やかなしいもので、これ以上重要なものを私は文学の中で決して取り扱わなかった。」²⁾と述懐している。

《分身》に対する作者自身のこのような高い評価を裏付ける事実は、作者が幾度か志して終に果し得なかった改作の企図である。³⁾ これらの企図の中で最後のものは、1861-1864年に書かれたと想定される二つの小さな手帖にうかがわれる。⁴⁾ 1865-1866年に出たステルロフスキー版のドストエフスキー全集に於ては、——従って又現在の形に於る《分身》に於ても——これらのノートは全く利用されなかったが、ともかくこれらのノートの中には《分身》改作のための多くの草案が書き残されている。

《分身》に対する作者のこのような強い執着は、一体何にあったのか？ それは、ドストエフスキーがその後の諸作品でしばしば取り上げたテーマ——《分身》という題名そのものに象徴されている「人間の二重性」のテーマにあると云えるであろう。

A. C. ドリーニンが、もしドストエフスキーの後期の五大長篇——《罪と罰》・《白痴》・《悪霊》・《未成年》・《カラマーゾフの兄弟》を、五幕から成る偉大な古典悲劇に擬するならば、そのプロローグとなるであろう、と指摘した⁵⁾ 《地下生活者の手記》(《Записки из подполья》, 1864), その他多くの批評家がドストエフスキーを理解するために極めて重要視した《地下生活者の手記》の主人公を、《分身》の主人公ゴリヤートキンと比較してみよう。

ゴリヤートキン氏の心の中で相闘うあらゆる矛盾した力が、地下生活者の中でも絶望的な格闘を演じていないであろうか？ 彼も又分裂した人格であった。彼は現実に於ては完全に無力であり且つ無能である、それにも拘らず熱烈に権力を渴望してやまない、彼はたえず人々に嘲笑されのけ者にされている、従って又自分も外の人々を嘲笑しのけ者にしてやりたいと熱望する、彼は極端なまでの自己卑下におちいりながらも、同時に誇高く我が身を持したいと願う、彼の人間性のあらゆる肯定面は、そのあらゆる否定面と或いは交替し、

1) Письма, стр. 257, Брату, 1/X 1859.

2) Ф. М. Достоевский, «Дневник писателя за 1877 год», Берлин, 1922, стр. 455.

3) この改作の企図は次の四つの手紙の中に見られる。

1. 「僕は《貧しき人々》と改訂した《分身》を単行本で出そうと決心しました。」(Письма, стр. 100, Брату, конец октября 1846.)

2. 「この小説を書き終ったら、僕は自分の三つの小説(《貧しき人々》と最終的に改訂した《分身》)の自費出版に着手します。」(Письма, стр. 109, Брату, Апрель 1847.)

3. 「N.B. 後日、《分身》を推敲して、というよりもむしろ完全に新らしく書き直したものを、その他を出版することが出来ます。」(Письма, стр. 247, Брату, 9/V 1859.)

4. 「僕は12月の中頃までに、《分身》に手を入れたものをあなたに送ります(もしかしたら、自分で持って行きます)。誓って云いますが、兄さん、この序言のついた改訂版は、新しい小説というべき価値があります。彼等もついに、《分身》がいかなるものであるかが分るでしょう！」(傍点ドストエフスキー), (Письма, стр. 257, Брату, 1/X 1859.)

4) См., Р. И. Аванесов, «Достоевский в работе над «Двойником», «Творческая история», под ред. Пиксанова, Москва, 1927, стр. 161-162.

5) См., А. С. Долинин, «Достоевский и Сусллова», «Ф. М. Достоевский, статьи и материалы», т. 2, под ред. А. С. Долинина, Л.-М., 1924, стр. 156.

或いは交錯しつつ、彼の心理と行動の面で矛盾に充ちた複雑な表現をとってゆく。いずれにせよ、現実の生活においてみじめな敗北を続ける無力な主人公は、ゴリヤートキン氏と全く同じように、唯空想の中で勝利者となり得るに過ぎない。彼は、この空想の中で、現実において達成し得ない彼の夢・彼の願望を奔放にくりひろげる。彼がゴリヤートキンと異っているのは、彼が高度の知性を具え、自分自身の二重性を明瞭に意識している点だけである。¹⁾

高度の知性を具えた後期のドストエフスキーの主人公達——ラスコリニコフ、スタヴローギン、ヴェルシーロフ、イワン・カラマゾフ——においても、分裂した人格、自己の中にもう一つの「自我」を明瞭に意識している人間を見出し得るであろう。彼等の個性の全一性が失われてゆくにつれて、彼等の心理と行動の面に於る二重性は次第に深まってゆく。そしてついには、「第二の自我」が独立した人格を持つものとして登場し、ここに至って彼等の破滅は決定的なものとなる。ドストエフスキーの最後の大作《カラマゾフの兄弟》(《Братья Карамазовы》, 1879-1880) に於ては、発狂寸前にあるイワンの前に、彼の「第二の自我」である悪魔が極めて散文的な紳士の姿をかりて忽然と現われる。彼は悪魔との対話の中で、——「お前がほざいてることはみんな分っている、何故かって、それは俺が、俺自身が話しているんで、お前じゃないんだからな！」²⁾ (傍点ドストエフスキー)「お前は虚偽だ、お前は俺の病気だ、お前は幻だ。……お前は俺の幻覚なのだ。お前は俺自身の化身だ、然し、只俺の一面の化身……一番いまわしく愚かしい俺の思想と感情の化身なんだ。」³⁾「お前の目的は、お前が独立した存在で、俺の悪夢ではないということに俺に信じさせることにあるんだ。」⁴⁾「お前は独立した存在ではない、お前は俺だ、お前は俺なので只それだけのものに過ぎない！ お前はごみ屑だ、お前は俺の空想なんだ！」⁵⁾ (傍点ドストエフスキー) と悪魔に喰ってかかる。

このような「人間の二重性」の問題については、ドストエフスキーの他の作品に関しても尚多くを語り得るであろうが、このテーマが彼の創作に於ていかに大きな位置を占めているかは、この二つの例だけで十分に明瞭であろう。

この「二重性」の問題が初めて明確に表現されたのは、正に《分身》に於てであった、従って、この作品は、研究対象として特に重要な意義を有していると考えなければならない。

この小論の主要な課題は、主人公の人格分裂の過程をあとづけながら、彼の性格・現実 に於る彼の社会的位置・彼自身の内面的世界を、作品そのものに即して考察し、かくすることによって、これら三つのモメントの各々がそれぞれに深い矛盾をはらんでいること、主人公の「第二の自我」の人格化の必然性並びに主人公と「第二の自我」の相互関係がこれ

1) ゴリヤートキン氏の直属上官が Антон Антонович Сеточкин と名づけられ、一方地下生活者の直属上官が Антон Антоныч Сеточкин と名づけられていることは、注目に値する。ドストエフスキーが、《地下生活者の手記》を書く際に、《分身》を念頭に置いていたであろうとは、これによってもうかがうことが出来よう。

2) Ф. М. Достоевский, «Братья Карамазовы», т. II, Берлин, 1919, стр. 413.

3) Там же, стр. 414.

4) Там же, стр. 417.

5) Там же, стр. 422.

《分身》について

ら三つのモメント全体によって条件づけられていることを、明らかにすることにある。

II. 主人公の性格

四日間にわたって展開される《ゴリヤートキン氏の冒険》は、ドストエフスキー独特の創作手法によって、きわめてドラマティックに開始される。ドストエフスキーの多くの作品に於る主人公達と同じように、ゴリヤートキン氏の過去について、読者は作者から何一つ知らされない。作者が我々に主人公を紹介する時、既に彼は事件の渦中に己が身を投じ、発狂寸前の状態に立ち至っている。従って、主人公がいかなる人間であるかは、最初我々にとっては全く不明である。ただ我々は、事件の進行をあとづけ、発狂寸前の状態から完全な精神錯乱におちいってゆく主人公の言葉と行為を通して、又語り手ともいべき作者の口を通して、彼の性格・人格分裂の過程と原因等を知り得るだけである。

九等文官のゴリヤートキン氏は、ペテルブルグの或る役所に係長補佐として勤めている。従って、彼はささやかながら一応の社会的地位を維持してゆくことが出来、つつましく暮しさえすれば、経済的不安に脅かされることなしに無事に一生を送ることが出来たはずである。所がそうはならなかった。彼は、かつての自分の上官であり且つ恩人でもあった五等官ベレンヂェエフ氏の一人娘クララ・オルスーフィエヴナに恋し、身の程もわきまえず結婚を申し出る。勿論、何の取りえもないゴリヤートキン氏は、柄にもない求婚者としてすげなくしりぞけられる。それだけならまだしも、同じく九等官で彼が恋敵と目する課長の甥がまだ 26 才の若さで、彼より一足先に八等官に昇進してしまう。ここで彼の頭は混乱する。彼の頭の中には、世の中で成功し得るのは陰謀家だけだ、卑劣な行為をぬけぬけとやってのけ、ずるがしこく振舞い、他の人々をおとしいれるような連中だけが、地位も恋も富も名声も、すべてを手に入れることが出来るのだ、という固定観念が根を張り始める。それというもの、「彼にとっては、年中人が言葉によっても、視線によっても、身振りによっても彼を侮辱している、彼に対して至る所で陰謀がたくらまれ、落とし穴が掘られているように思われる」¹⁾ 程非常に猜疑心が強かったばかりでなく、又きわめて自尊心が強く、「侮辱されておめおめひっこんでしまうようなことは断じて出来なかった」²⁾ からでもある。ベリンスキー (В. Г. Белинский, 1811-1848) が述べているように、「彼の性格の病的な侮辱感と疑い深さが、彼の生活の黒い悪魔であり、この悪魔は彼の存在から地獄を作るように運命づけられている」³⁾ のであった。彼の自尊心と自己の体面を是が非でも維持したいと願う烈しい熱情は、彼の混乱しかかった頭の中に、実現不可能な自己防衛策を生み出す。彼は仮想の敵達に対して、自分の方でも陰謀をたくらみ、落とし穴を掘り、ずるがしこく立ち廻ろうと決意する。然し、彼が決意を固め、「俺がこのように策略をめぐらし

1) В. Г. Белинский, «Петербургский сборник», «Достоевский в русской критике», Москва, 1956, стр. 27. (以下、ベリンスキー、ドブロリユーポフ、アンネンコフからの引用は、すべてこの《ロシヤ批評におけるドストエフスキー》による。)

2) Ф. М. Достоевский, Собрание сочинений, Москва, 1956, т. I, стр. 292, (以下、《分身》の引用はすべてこれにより、Дос., Соб. соч. と記す。)

3) В. Г. Белинский, «Петербургский сборник», стр. 27.

て、自分の方でも負けずに落とし穴を掘っているのは、或る意味でいいことだぞ」¹⁾ とうそぶいても、果して彼は実行の面で成功し得たであろうか？

ここで我々は、ゴリヤートキン氏のこれまでの生活と性格の一端を、彼とかけつきの医者クレスチャン・イワーノヴィチとの会話から聞きとることにしよう。主人公自身が、「医者とは云わば、ざんげの聴聞僧のようなものだから、隠し立てするのは愚かな沙汰であるし、患者を知るといふことは医者の義務でもある」²⁾ と認めているのだから、診察室でなされたこの会話の真実性は、最も信用するに足るであろう。医者はゴリヤートキン氏に対して、「あなたは私の指示したことを守らなくちゃいけません。あなたの療法としては、習慣を変えることが必要だと、申し上げておいた筈です……まあ、いろいろな気晴しとか、それに又、友人や知り合を訪問することも必要だし、それと一諸に酒も毛嫌しないようにして、なるべく万遍なしに、賑やかな仲間にもまじって遊ぶことですね。」³⁾——「あなたは生活全体を根本的に改革しなくてはならないし、或る意味においては、御自分の性格に打ち克たなくちゃなりません。(クレスチャン・イワーノヴィチは《打ち克つ》という言葉を特に強調して、いかにも意味ありげな様子で、ちょっと言葉を休めた。) 賑やかな生活を避けてはいけません。劇場やクラブに出入すること、そしていずれにしても、酒を毛嫌しては駄目ですよ。家に引っ込んでちゃいけません……絶対家に引っ込んでちゃ駄目です。」⁴⁾ と忠告する。これに対してゴリヤートキン氏は、「クレスチャン・イワーノヴィチ、私は静かなのが好きなんです……自分の住居ですと、私一人だけ、それにペトルーシカがいるだけです……いや、召使の男と申し上げるつもりだったのです、クレスチャン・イワーノヴィチ。実は、クレスチャン・イワーノヴィチ、私は自分自身の道を行きたいのです、特殊な道を行きたいのです、クレスチャン・イワーノヴィチ。私は独立独歩で、自分の感じている限りでは、誰にも拘束されていないつもりです。」⁴⁾——「クレスチャン・イワーノヴィチ、私は静寂を愛するのです、俗世間の騒々しさが嫌なのです。ああいう所では、つまり、社交界なんて所では、クレスチャン・イワーノヴィチ、靴で嵌木床を磨くのが、上手にならなくちゃ駄目なんですからね……(そう云って、ゴリヤートキン氏は足でちょっと床をこすって見せた)、ああいう所では、それが要求されるんです、洒落も必要です……愛嬌たっぷりのお世辞もふりまかなければなりませんし……すべてそういった風なことが要求されるんですからね。ところが、私はそいつを習っていないんです、クレスチャン・イワーノヴィチ、——そんなややこしい事からは、一切習っていません、そんな暇がなかったのです。私は、単純で素朴な人間でしてね、上べだけのつやなんてものは持ち合せていません。」⁵⁾ と答える。この会話から分るように、ゴリヤートキン氏は、これまで殆ど社交界に顔を出さず、孤独の生活を送っていた。彼は、俗世間的な世渡りの巧みさは勿論、人垣の社交術さえ満足に持ち合せていない。小心なゴリヤートキン氏は、人中に出るのを極度に恐れ、社交界を避けて自分自身の中に閉じこもる、こうして長い間孤独の中で静寂を愛し続けてき

1) Дос., Соб. соч., стр. 324.

2) Там же, стр. 215.

3) Там же, стр. 217.

4) Там же, стр. 218.

5) Там же, стр. 218.

《分身》について

たのであった。しかも、彼の持って生れた本来の性格は、——「《私に構わないで下さい、私もあなた方に構ったりなど致しませんから》とか、或いは又、《私に構わないで下さい、現に今私はあなた方に構ってなどいないのですから》、と云わんばかりの歩き振りをしたり」¹⁾、又「こっそり姿をかくし、群集の中に紛れ込みたがる」²⁾ 点にあった。ところが、このように現実の生存競走において全く不適格なこのゴリャートキン氏が、自己の価値を過信し、自尊心と野心に駆られて、「自分自身の道を行きたい」「特殊な道を行きたい」と思ったのである。孤独の空想の中から生れ出た妄想——「私を破滅させようと心に誓ったよこしまな敵がいる」³⁾ という妄想・自己の体面をあくまで守りたいという熱情・ボロ切れ扱にされることに断じて我慢のならぬ烈しい彼の自尊心は、何かしなくてはならぬ、何とか手を打たなければならぬという行動の意欲を、絶えず彼の心の中にかき立ててゆく。だが、この意欲に駆られて彼が行う一切の行為は、彼自身の性格のために、必ず自己の完全な無力の意識によって終らざるを得ない。

《ゴリャートキン氏の冒険》の第一日は、又彼の恋人クララ・オルスーフィエヴナの誕生日でもあった。招かれざる客としてベレンヂェーエフ家を訪れたゴリャートキン氏は、当然のことながら、あっさり門前払をくわされる、意気揚々と乗り込んだ時とうって変って、その時彼は「心中ひそかに、馬車もろとも大地の割目に落ち込んでしまうか、それとも鼠の穴へでも身を隠したい気持がした」⁴⁾ のであった。この時、彼の行動への意欲・激しい願は、あとかたもなく消え失せる。

然し、この無力の意識も、やがて行動への意欲に再びその位置を譲ってゆく。彼は、拒絶された誕生日の晩さん会に出たいという意欲に打ち克つことが出来ない。作者は、「バルタザール王の饗宴にも似た」⁵⁾ この晩さん会に闖入せんものと、こっそり恋人の家に忍びこんでいるゴリャートキン氏を、次のように描いている、——「諸君よ、彼もここにいたのである、つまり、舞踏会にいたのではないが、殆ど舞踏会の席にいたのも同様である、諸君よ、彼は別にどうもしたのではない、彼はいつもの彼に相違ないのだが、この時彼は全く正当な道を踏んでいたとは云えないのである。彼は今——口にするさえ奇妙なことだが——オルスーフィ・イワーノヴィチの家の裏階段の所にある入口の間に立っていたのである。……諸君よ、彼はそれ程暖くはないが、その代りうす暗い所に隠れ、片隅にただずんでいるのであった、大きな戸棚と古い衝立で半ば姿を隠し、ありとあらゆるボロ屑やがらくたや古道具の中で、時がくるまで身をひそめ、今の所は局外の傍観者として事の成りゆきを全部観察しているだけなのである。諸君よ、彼は今ただ観察しているに過ぎないのだが、彼だってやはり中へ入ってゆけるのだ…… どうして入ってゆけないわけがあるう？ ただ一歩踏み越えさえすれば、入ってもゆけるし、しかもちゃんと巧みに入ってゆけるのだ。今はただ、——戸棚と衝立の間で、がらくたやボロ屑や古道具の中で、もう二時間以上も寒い中に立ち続けているのである。」⁶⁾ 彼は、ここから食器室へ入り、それから茶の間を通り、

1) Там же, стр. 219.

2) Там же, стр. 261.

3) Там же, стр. 222.

4) Там же, стр. 234.

5) Там же, стр. 235.

6) Там же, стр. 239-240.

カルタを戦わしている部屋に侵入し、最後には舞踏会の行われている広間へ入り込む算段をしている。然し、こっそり裏階段からここまで忍び込みながら、何故か彼は、「それ以上先へ進む決心がつかなかった、明らかにそうする決心がつかなかったのだ……それというのも、何かで決心がにぶったからではなくて、自分がそうしたくなかったからである、むしろ彼は目立たぬようにやりたかったからである。」¹⁾ だが、ついにチャンスがきた、食器室に誰もいないのを確かめると、「たった二足で扉に近寄り、もうそれを開けようとしかけた。《進んだものか、それともよしたものか？ さあ、進んだものか、よしたものか？ 進んでゆこう……どうして入ってゆけないわけがあるろう？ 勇者には到る所道が開けるのだ！》²⁾ と思いつつも、ゴリャートキン氏はすぐさま衝立の陰に退却してしまう。行動への意欲と無力の意識とが、こうして小ぜり合を続けてゆく。作者は、その「宿命観」によって、この小ぜり合に結末をつける。人間の意志を超越した運命の力が、ゴリャートキン氏を動かしてゆく。彼は、「何かしら或るバネみたいなもの」³⁾ にあやつられ、「宿命」⁴⁾ に引きずられながら、ついに初志を断行する。彼は、人々を突きとばしながら、無我夢中で目的の場所目ざしてどんどん先へ進んでゆく。それと同時に、彼はやはりいつもの無力感におちいってゆく。作者は、その状態を次のように描いている、——「一点の疑をさしはさむ余地もない、この時彼は、大地の割目にでも消え失せることが出来るものなら、どんなに喜んで眉一つ動かさずに、そうしたことであろう。」⁵⁾——「勿論、今もし礼儀作法を破ることなしに、裏階段脇の入口の間にひそんでいた前の状態に戻ることが出来たら、どんな高価な犠牲も惜しみはしなかつたらう、然し、それは到底できない相談なので、彼は何とかして、安心して立ていられるどこかの片隅にもぐり込んで、誰にも構わないように、余り人目を引かないように、しかも同時に、客人達や主人の好感が得られるように、つつましく、礼儀正しく、孤立して控えていようと、努めはじめた。」⁶⁾ このように、彼にあっては、生活に対する恐怖と自尊心の悩から生ずる行動への意欲は、「完全に消滅してしまいたい、無に帰し、ちりひじと化してしまいたいと望む」⁷⁾ 無力の意識と常に接触を保ち、反撥し合いながら、交互に優勢なものが前面に現われてくる。ここに、ゴリャートキン氏の最も矛盾した性格——「ボロ切れみたいになって、おとなしく破滅するのかと思うと、中々そうではなくて、自尊心がどうのこうの、名与に傷がつくのどうの、体面を守らなければならないの、と騒ぎ立てる」⁸⁾ 人間、つまり、実生活において全く無能無力でありながら、尚且つ一人前の人間になろうと必死にもがいている主人公の矛盾した性格が現われている。

ゴリャートキンという一風変わった名前の由来について、或る批評家は、「ゴリャートキンという名が、ロシア語の形容詞 голый (裸の) からきており、いかに彼が無防備な人間で

1) Там же, стр. 241.

2) Там же, стр. 241.

3) Там же, стр. 242.

4) Там же, стр. 244.

5) Там же, стр. 242.

6) Там же, стр. 244.

7) Там же, стр. 250.

8) Там же, стр. 308.

}共に同じ言葉が二度ずつ使用されている。

《分身》について

あるかを示唆している」¹⁾と、指摘した。正にゴリャートキン氏は、処世術をわきまぬ自分が現実の生活において全く無防備であること、素手で生活を防衛しなければならぬことが恐ろしい。彼も彼なりに自分を武装しようと努める。彼は、会う人毎に、場所柄もわきまえず、自分が独立独歩・公明正大・親切・潔白・正直であること、お世辞を云ったり、うまく立ち廻ったりしない人間であることを主張する。「御存知の通り、私はちっぽけな人間です、然し幸いなことには、私はちっぽけな人間であることを、残念には思っていません。かえってその反対です、クレスチャン・イワーノヴィチ、あらいざらい云ってしまいましたが、私は自分が大人物でなくて、ちっぽけな人間であることを、むしろ誇っているぐらいです。私は、陰でこそこそしないで、公然と、奸策を弄しないで行動しています。」²⁾とか、「諸君、今まで君達は、私という人間を知っていなかったのです。今ここで説明して聞かせるのは余りよい折とは云えないから、ただほんの少しだけざっと話して上げよう。世の中にはね、諸君、廻り道が嫌いで、面は仮面舞踏会の時しかつけない人がいるんですよ。人間の真の使命は、靴で嵌木床を上手に磨く能力にあるんじゃないってことを理解している人もいますよ。」³⁾という調子で、相手が上役であれ、同僚であれ、知人であれ、聞かれもしないのに、自分の存在を相手に認めさせようと、躍起になって説明に努める。この最後の抵抗線——自己の独立性の主張も、勿論誰一人として相手にしてくれない。

然し、このように誰からもかえり見られないゴリャートキン氏にも、彼がすべての人に好かれ、重んぜられ、尊敬され得るような世界があった。現実には打ちのめされたゴリャートキン氏は、彼に残された唯一の避難所をこの世界に求める。それは、現実の世界ではなくて、空想の世界であった。

ステルロフスキー版を出す際に、作者によって削除されてしまったが、初版の《祖国の記録》においては、作者はゴリャートキン氏の一つの特徴にふれ、——「彼は、時々自分自身に関して若干の小説的な仮定を立てるのが非常に好きであった、彼は時々自分を非常に手のこんだ小説の主人公に見立て、空想の中で自分をさまざまな陰謀や困難の中にまき込み、最後には、あらゆる障害を打破し、困難に打ち克ち、寛大にも自分の敵共を赦して、面目を失うことなしに一切のトラブルから我が身を救い出すのが好きであった。」⁴⁾と、説明している。かくして彼は、孤独の空想の中で、自分をしばしばメロドラマの主人公に見立て、社会の寵児としてもはやされる輝かしい人物に仕立て上げる。現実の生活から受ける打撃が大きければ大きい程、益々彼は空想に耽溺し、その色彩は一層絢爛たるものになってゆく。

然し、彼の空想に現われる主人公が、必ずしも彼が常日頃主張しているような公明正大で高潔な人物ではなかったという点を、絶対に見逃してはならない。彼は、辛い浮世の経験から、彼の住んでいる社会の成功者が、機敏で狡猾で抜目のない人間であることを、身にしみて感得していた。すこぶる単純で知性に欠けたゴリャートキン氏にとっては、彼の空想の主人公が敵に十分対抗し成功を博するためには、機敏・狡猾・抜目なさの点で敵に

1) Helen Muchnic, «Russian Literature», New Yrok, 1947, p. 152.

2) Дос., Соб. соч., стр. 220.

3) Там же, стр. 230.

4) Там же, стр. 635.

劣らぬ程の人物が必要であった。その上更に、彼の心の奥底には、そのような人物になりたいたらうとそそのかす「第二の自我」がひそんでいた（これについては後章で論ずる）。

彼は、空想の中で、巧みに社交界の嵌木床を磨き、すべての人々とうまく調子を合せ、チャンスを逃さずお追従をふりまき、陰では巧妙な陰謀をめぐる事の出来る人間として自分を想像する。ゴリャートキン氏にとって、現実の世界ではこの上もなく厭わしく思われた人間が、空想の世界では、彼がそうなりたいと熱望する人間・彼の偶像に変わる。彼の無力感が深まるにつれて、益々彼はこの空想の世界にすがりつく、そして、余りにもこの世界に慣れきってしまったために、彼には、この偶像が空想の産物ではなくて、彼そのもののように思われてくる。かくして、彼の人格は二つに分裂し、彼の二重の生活が始まる。空想の主人公は、彼の意識の中で次第にはっきりした形をとり、ついには完全に別個の独立した人格体となる。

恋人の家で催された例の舞踏会から叩き出され、絶望と苦悩に身も世もあらぬ状態におちいったゴリャートキン氏は、ペテルブルグの闇と吹雪の中を我が家をさして夢中でひた走りに走る、遂に彼は力尽きてフォンタンカの河岸の欄干にぐったりともたれ、どんよりした黒い水を長い間じっと見つめていた。「突然……突然彼は全身をわなわなとおののかせ、思わず二歩ばかり脇へ跳びのいた。云いようもない不安を抱いて、彼はあたりを見廻しはじめた、然し、そこには誰もいなかったし、何一つ変わったことは起らなかった、——にも拘らず……それにも拘らず、誰かが今、たった今、彼のそばに、彼と並んで、同じく河岸の欄干にもたれて、ここに立っていたように思われた、しかも——不思議にも！——何か彼に物を云ったような気さえたのである、それも何か早口にきれぎれに、よくは分らなかったが、何か彼に非常に身近な彼の身に関係のある話なのである。「一体どうしたんだらう、ただそんな気がただけなのだろうか？」——とゴリャートキン氏は、もう一度あたりを見廻しながらつぶやいた。」²⁷⁾——この予感実現しないではない。感乱したゴリャートキン氏の前に、吹雪をついて終に彼の分身——第二のゴリャートキン氏が姿を現す。このきわめて迫りに満ちた分身出現の章を、作者は次のように結んでいる、——「深夜の友は、ほかならぬ彼自身であった、——ゴリャートキン氏自身であった、第二のゴリャートキン氏であった、だが彼自身とそっくりそのままの男で、——一口に云えば、あらゆる点で云わば彼の分身なのであった……」²⁸⁾

III. 主人公をとりまく外的世界

我々は前章で、ゴリャートキン氏の性格を考察し、且つ彼の人格がいかにして分裂するに至ったかについて、おおよそ理解し得た。ここでは、分裂の原因と過程を更に深く追求しつつ、主人公をとりまく生活環境を観察し、彼と外的世界との相互関係を明らかにしよう。

次第に発狂に追いつめられてゆくゴリャートキン氏の悲劇は、勿論彼自身の性格にもよるが、更に尚二つのモメントによって引き起されたと考えることが出来る。一つは彼をと

27) Там же, стр. 251.

28) Там же, стр. 257.

《分身》について

りまく外的世界であり、今一つは彼個人の内面的二重性である。両者が共にはたらいっていることは言うまでもないが、果していずれのモメントが作品の中で大きな比重を持っているであろうか？ 結論から先に云えば、後者の方が前者よりも圧倒的に大きいと云えるであろう。フリードレンデルが指摘しているように、——「若きドストエフスキーは、《分身》においては、《貧しき人々》と反対に、広汎な社会的背景の描写を取り上げていない。僅かに個々の場面——オルスーフイ・イワーノヴィチ家の舞踏会・役所における一連の諸場面・主人公と従僕ペトルーシカとの間の挿話的諸事件——の中に、彼を取りまく官吏社会・彼と生活及び彼と彼自身の関係を条件づけた所の官吏社会の俗悪な習俗が、リアリスティックなゴゴリ的色彩で描かれているだけである。作者がもっぱら描き出そうと努めているものは、——ゴリャートキンの意識の中に、彼の知能の低さと次第に進行してゆく精神錯乱によって、主人公と周囲の世界との衝突を作り出してゆく所の幻想的な心的映像なのである。」¹⁾——正に、作者は悲劇の背景をなす主人公の生活環境を後景に押しやり、彼の内面的世界の矛盾を悲劇の最も重大なモメントとして前景に押し出す。かくして、《貧しき人々》によって「ロシヤにおける社会小説の最初の試み」²⁾を行った作者は、第二作《分身》においては、社会的背景を小説の舞台に必要な最小限に止め、人間の内面的世界の矛盾にもっぱら照明を当てる。ここに、作者の世界観の重大な基盤となった人間性に対する疑惑——人間の心の奥底には、善なるものとならんで、卑劣な本性を發揮しようとする絶えず機会をうかがっている第二の自我、第二のゴリャートキンが不可避的にひそんでいるのだという疑惑——が、初めて明確に表明された。

では、「才能ゆたかな作家によって 170 頁にわたって物語られた精神錯乱」³⁾の原因が、周囲の社会と余り密接な関係を持たないという理由で、主人公をとりまく生活環境を論外に置くべきであろうか？ このような断定は余りにも性急であって、必ずしも当を得たものとは云えないであろう。ゴリャートキン氏の悲劇の底に横たわる生活の真実は、後景に押しやられたとはいえ、炯眼な観察家ドストエフスキーの眼から迂り抜けてはいなかったように思われる。我々は、「主人公をとりまく低俗な官吏社会の個々の諸場面」を通して、彼を発狂に追い詰めた周囲の現実を観察してみよう。

ドストエフスキーは、ステルロフスキー版を出す際に、《分身》のサブタイトル《ゴリャートキン氏の冒険》を《ペテルブルグの^{ポエマ}叙事詩》（《Петербургская поэма》）と改めた。アヴネーソフは、この変更を説明することは困難であると前置して、ゴゴリ（Н. В. Гоголь, 1809-1852）の《死せる魂》が《チチコフの冒険又は死せる魂》《Похождения Чичикова или Мертвые души》と題されていること、更にゴゴリがこれを「^{ポエマ}Поэма」と呼んでいること、ドストエフスキーが当時《死せる魂》の強い影響下にあったこと等を指摘して、それらをこれに関連づけている。⁴⁾ ゴゴリが《死せる魂》を「ポエマ」と名

1) Г. М. Фридлендер, «Достоевский», «История русской литературы, литература 70-80-х годов XIX века», книга II, М.-Л., 1956, стр. 22.

2) П. В. Анненков, «Замечательное десятилетие (1838-48)», стр. 36.

3) Н. А. Добролюбов, «Забитые люди», стр. 76.

4) См., Р. И. Аванесов, «Достоевский в работе над «Двойником»», стр. 169, 这里アヴネーソフは、意味は同じであるが、《Похождения Чичикова》を誤って《Приключения Чичикова》と記している。

付けたことに関して、B. B. カラーシは、ゴゴリ自身がその《文学教程》¹⁾の中で、《個々の目立たぬ人物ではあるが、然し、人間の魂の観察者にとっては、多くの点で注目に値する人物を主人公とし、あたかもロマンとエポペーヤ（叙事詩）の中間をなすが如き》物語作品（詩及び散文の）について語っていることを指摘し、更に続けて、ゴゴリの観点からすれば、《死せる魂》がこの「エポペーヤ」又は「ポエーマ」の概念に完全に適合する、と述べている。²⁾このような考え方に立つならば、小説《分身》も形式及び内容の上から確かに「ポエーマ」と云い得るし、従って又、アヴネーソフの推測も或る程度裏書きされるであろう。

我々は、更にもう一つの推測を付け加え得るであろう。それは、プーシキン (A. C. Пушкин, 1799-1837) の「ポエーマ」《青銅の騎士》(《Медный всадник》, 1833) との関連である。プーシキンは、その「ポエーマ」《青銅の騎士》に《ペテルブルグの物語》(《Петербургская повесть》^{ボエエスチ}) というサブタイトルをつけ、一方ドストエフスキーは、その「ボエエスチ」《分身》に《ペテンブルグの叙事詩》(《Петербургская поэма》^{ボエエマ}) というサブタイトルをつけている。この一見して明瞭な照応関係は、果して単なる偶然の一致であろうか？ だが、今の所我々は両者を関係づける確証を有していない。然し、ドストエフスキーは終生変ることなくプーシキンを敬愛し、彼から非常に強い影響を受けている、たとえば作品の上でも、ドストエフスキーは、《白痴》(《Идиот》, 1868) のムイシキン公爵の基本的形象をプーシキンの《貧しき騎士》(《Рыцарь бедный》, 1829) から汲みとり、《未成年》(《Подросток》, 1875) の重要なモチーフを《吝嗇の騎士》(《Скупой рыцарь》, 1830) から借りる等、多くのものをプーシキンに負っている。

プーシキンは、《青銅の騎士》において、ピョートル (Петр I, 1672-1725) が荒涼たる沼池を開拓し、そこに「ヨーロッパへの窓」を押し開いた美しい幻想的なペテルブルグを背景に、若く貧しいささやかな官吏エヴゲーニイのいたましい破滅を描いている。エヴゲーニイの恋人パラージャは、突如として襲った嵐の夜、氾濫したネヴの荒波にのまれる、素朴な恋の破滅による心の傷手にたえきれず、彼はついに狂気のとりことなる。プーシキンは、ピョートルと彼の建設したペテルブルグを讃えながらも、一方貧しくつましい平凡な官吏エヴゲーニイの苦悩に激しい同情の念を寄せる。ここでは、ペテルブルグに象徴される国家社会の利害と平凡な一官吏に象徴される個人の利害との矛盾が、鋭く追求されている。

この幻想的で巨大な新興都市ペテルブルグを舞台とした平凡な人間の悲劇——「新らしい首都の最初のラプソディスト」³⁾ プーシキンが初めてロシア文学にもたらしたものを、ゴゴリはその「ペテルブルグ物」(Петербургские повести) において大きく取り上げ、この大都会にうごめく平凡な人間のささやかな喜びと大きな悲しみを歌い上げた。ドスト

1) Н. В. Гоголь, «Учебная книга словесности», «Полное собрание сочинений Н. В. Гоголя в десяти томах», т. 10, 1922, стр. 319, この《文学教程》は、40年代の中頃に書かれ、ゴゴリの死後に出版された。

2) См., «Сочинения и письма Н. В. Гоголя, под ред. В. В. Калаша», СПб, 1908-1909, т. 4, Вступительная статья В. В. Калаша, стр. 15.

3) Mark Slonim, «The Epic of Russian Literature», New York, 1950, p. 92.

《分身》について

エフスキーが取り上げたものは、正にこれであった。彼の作品の大部分は、ペテルブルグを舞台とし、そこに登場する多くの平凡な打ちのめされた人々、特に初期の作品の殆どすべての主人公が、ペテルブルグの重圧の下に破滅してゆく。ゴリャートキン氏も、その例外ではなかった。

40年代は、「ロシアの官僚主義的・階級的・農奴制的社会機構の古い基盤が、経済的な発達によって、激烈に揺ぶられた時代であった。」¹⁾ 農奴制の崩壊過程と資本主義の成長過程が、矛盾をはらみながら平行して進行し、次第に後者が前者にとって代ってゆく。それにもかかわらず、デカブリストの血に塗れた弾圧によって治世を開始したニコライ一世(Николай I, 1796-1855)は、歴史の必然性に逆らって、専制及び農奴制の維持と強化を、その最も重要な政治的課題とした。そのための一手段として、彼は官僚機構の強化に多大の努力を傾けた。従って、政治のあらゆる分野にわたって、官吏の果す役割は益々大きく、国家権力によって支えられた彼等の権威も又増大していった。官吏の多くは、この虚構の権威をかさにきて、官僚主義を発揮し、事務を遅滞させ、平然と贈収賄を行い、一般民衆や下の者に対しては横暴をきわめながら、権力に迎合し、上司にこびへつらい、立身出世のためには手段を撰ばなかった。

このようなニコライ時代の官吏の典型として、第二のゴリャートキン氏は、《分身》の中で三度も同じ筆法で描かれている、——「第二のゴリャートキン氏は、彼独特の凶々しさであたりを見廻し、役人達のまわりをここを先途とせかせか小刻みに歩き始めた、——恐らく、自分に有利な印象を残して置こうという腹なのだろう——或る者には何か一こと話しかけ、次の者には何か耳打ちをし、第三の者には恭々しげに接吻し、第四の者には微笑を送り、第五の者には握手して、いそいそと階段を下りてパッと姿を消した。」²⁾——「一人の男と接吻して、その好感を得たかと思うと、——忽ちあっという間もなく、もう第二の男のそばに立っている。ひそかに第二の男と存分接吻し合って、好意に溢れた微笑をもぎ取ると、少々短かくて丸っこい、いささかごつごつした足をびよんとはねて、早くも第三の男にへばりつき、これをも巧みにたらしこんで、彼とも親友の接吻を取り交してしまう、口を開けてあっと驚く間もあらばこそ、彼は既に第四の男のそばに立っており、この第四の男とも同じ関係を結んでしまう。」³⁾——「歯をむき出して笑いながら、ちょろちょろ、せかせか歩き廻り、みんなに向って《今晚は》と云わんばかりの笑顔を見せ、役人達の群へ割って入るが早いか、一人の者とは握手をし、次の者の肩を叩き、第三の者をはかるく抱きしめ、第四の者には、どういうチャンスで閣下の用事を仰せつかり、どこへ行って何をし、何を持って帰ったか、ということを説明して聞かせ、第五の無二の親友らしい男には、唇の真上にチュッとばかり接吻した。」⁴⁾

このような腐敗墮落した役人達の社会の中に、ゴリャートキン氏は置かれていたのである。彼は、長い間彼の上におしかぶさってきた生活の経験によって、自己の社会的立場を

1) Г. Е. Горбачев, «Достоевский и его реакционный демократизм», «Ф. М. Достоевский», Москва, 1929, стр. 205.

2) Дос., Соб. соч, стр. 292-293.

3) Там же, стр. 316.

4) Там же, стр. 327-328.

よく理解していた。然し、小心で無能なゴリャートキン氏は、彼等のように官吏社会を巧みに泳ぎ廻ることが出来なかったばかりでなく、現実において（心の奥底にひそむ第二の自我が、ほしいままに振舞う空想の世界は別として）彼等を心から憎み軽蔑していた。彼は、周囲の役人達が出世の道としている行為や手段を認容し得ないし、又そのように生活する能力を持たなかった。従って、自己の性格・自己の能力にそぐわない環境に置かれたゴリャートキン氏は、否応なしにこの環境から脱落するように運命づけられている。彼には止るべき社会的位置が存在しなくなる。このような彼の社会的立場の不安定とそれによってよび起される生活に対する恐怖は、この作品のクライマックスに当るゴリャートキン氏の悪夢の中に、集中的に表現されている。ドストエフスキーの作品に現れる夢は、——たとえば、ラスコリニコフ（《罪と罰》）やドミートリイ（《カラマーゾフの兄弟》）の夢のように——しばしば作品の象徴的意味を暗示し、作品において重大な役割を演じているが、ゴリャートキン氏の悪夢も、きわめて深い示唆に富んでいる。

「我が主人公は甚だ寝心地がよくなかった、つまり、何としても五分間さえろくに眠れなかったのである、まるでどこかのいたずら者が、細かく切った動物の毛を寝床の中にまき散らしたような工合であった。彼は一晩中、半睡半醒の状態を過し、さかんに寝返りをうったり、溜息をついたり、呻き声を立てたりして、ちょっと寝込んだかと思うと、すぐ又目がさめてしまう、しかもこれらすべてには、何かしら不思議な悩ましき、漠然とした追憶、醜悪な幻、——一口に云えば、ありとあらゆる不愉快なものがつきまとうのであった……」¹⁾ こうした夢の中で、ゴリャートキン氏は、やっとの思いで課長のそばまでたどりつく、そして「何とかして身のあかしを立てんものと、自分は全く敵共がふれ廻っているような人間ではなく、実はこれこれかような男で、持って生れた十人並の資質のほかにもっとこれこれしかじかのすぐれた美点さえ持っているのだ、と説明しかけるが早い、そこへひょっこり、例のけしからぬ傾向を以て知られている人物が現れて、何かしらきわめて不愉快なやり方で、即座にゴリャートキン氏の予定計画をことごとく粉碎し、その場で、殆どゴリャートキン氏の目の前で、彼の名与を根本的に傷つけ、彼の野望を泥土の中に踏みにじり、その後で即座に勤務上・社会上の彼の地位を占めてしまう。」²⁾——「又、そうかと思うと、ゴリャートキン氏は、ある立派な集りに加わっている夢を見た、それはメンバーのすべての人々が、機智に富み、態度に気品があるので有名なサークルであった。ゴリャートキン氏も愛想がよく、機智豊かな点ですぐれており、みんなに好かれるようになった。丁度そこに居合せた幾人かの彼の敵までが、彼を愛するようになったので、ゴリャートキン氏はすっかりいい気持になってしまった。一同は彼にイニシャチーフを取らせるようになったばかりか、ついには主人が客の一人を脇の方に引っ張って行って、ゴリャートキン氏を讃めはじめ……当のゴリャートキン氏は、それを小耳にはさみながらほくほくしている、すると突然、どこからともなく例のよからぬ意図と動物的本性を以て知られた人物、第二のゴリャートキン氏が現れて、忽ちあつという間に、その出現によって、第一のゴリャートキン氏の勝利と栄光を全部うちこわし、第一のゴリャートキン氏の名声を

12) Там же, стр. 313.

13) Там же, стр. 314.

《分身》について

己が物とし、第一のゴリャートキン氏を泥土の中にふみにじり、揚句の果には、本物の第一のゴリャートキン氏が、——決して本物ではなくてにせ物であること、自分こそが本物であること、最後に、第一のゴリャートキン氏は決して見せかけのような人物ではなく、実はこれこれしかじかのやくざ者で、従って、善良で立派な人々の社会に属すべきではないし、そういう権利を持っていないのだ、と証明する。」¹⁾——このように、ゴリャートキン氏が成功しそうになると、すぐさま第二のゴリャートキン氏が現れて、彼を完全に粉碎し、彼の地位を奪い取ってしまう。悪夢は更に続き、「恥かしさと絶望に我を忘れて、まったく正当なのに破滅に瀕したゴリャートキン氏は、運を天に任せて、当てずっぽに足の向く方へ駆け出した。然し、その一足ごとに、彼の足が歩道の御影石を踏むたびに、彼とそっくり瓜二つの墮落した心を持った忌わしいゴリャートキン氏が、一人ずつ地面から湧いて出るように跳び出すのであった。しかも、これらの瓜二つと云ってよい程よく似た連中が、跳び出すが早いか、互に後から後から走り出し、鷲鳥の行列みたいに長い列を作って、第一のゴリャートキン氏の後をつけ、ひょこひょこついてくるので、このそっくりそのままの連中から逃げ出す所もなくなり、まったく同情に価するゴリャートキン氏は、恐怖の余り息がつまりそうになった、——揚句の果には、そっくりそのままの人間共が雲霞の如くふえてきて、ついには、首都全体がこれらの人間共で溢れそうになった。」²⁾——この悪夢の底にひそめられた悲劇的な社会的意味は、次のように解釈され得るであろう。——「雲霞の如き」大軍となってゴリャートキン氏を追跡するもの——それは、ニコライ時代における無数の官吏社会の遊泳者達・「墮落した心を持った忌わしい第二のゴリャートキン氏」の群であり、彼等によって「首都全体が満たされた」時、止まるべき社会的位置を持たない主人公は、否応なしにここから弾き出されたのであると。

では、彼は何の抵抗もせず破滅したのであろうか？ 彼は、周囲の人々の嘲笑を甘んじて受け、のけ者にされ、ボロ屑扱にされるには、余りにも自尊心が強過ぎた、作者は、彼の重大な矛盾を次のように特徴づけている。——「彼は侮辱されておめおめひっこんでしまうようなことは断じて出来なかった、ましてやボロ屑同然に扱われること、しかも全く墮落した人間にそんな目にあわされることは、我慢がならなかった。然し、私達はあえて云い張りはしない、あえて論議することはしまい。誰であろうと、是非ゴリャートキン氏をボロ屑にしてやりたいと思った者は、確かにそうすることが出来ただろう、しかも何の抵抗も受けずに難なくやりすまることが出来ただろう（当のゴリャートキン氏も、時にはそれを感じていた）、そうすれば、ゴリャートキン氏ではなくて、一片のボロ屑が現れるであろう——それも下劣な汚らわしいボロ屑が現れるであろう。然し、このボロ屑は、簡単に片づけられるしろ物ではなくて、自尊心を持ったボロ屑、魂と感情とを持ったボロ屑なのである。たとえこのボロ屑の汚いひだの奥深く隠されて鳴りをひそめている自尊心であり感情であるにしても、それでもやはり感情を持っているに違ない。」³⁾

ドブロリューボフ (Н. А. Добролюбов, 1836-1861) はこの個所を引用し、最後のところを強調して、「ゴリャートキンのような打ちのめされた人々、実際にまるでボロ屑みたい

1) Там же, стр. 315.

2) Там же, стр. 317.

3) Там же, стр. 292.

にされ、汚らしいひだの中にだけ、何かしら人間的なもの・おとなしくしているもの・鳴りをひそめているものではあるが、それでもどうかすると時には自己の存在を感じさせることのある或るもの——このようなものの残滓を保っている人々の状態を、これ以上美事に特徴づけることは、困難であるように私には思われる。正にこれが、ゴリャートキン氏に自分の存在を感じさせたし、重苦しい疑惑と疑問がヤーコフ・ペトローヴィチの貧弱な理性と想像力の上に、ずっしりとのしかかったのである。」¹⁾と述べている。ドブロリューボフが指摘しているように、この打ちのめされたゴリャートキン氏の鳴りをひそめている人間的なものは、時として心の底から燃え上らないではない、そして自己の人間的存在を感じずる時、彼はこの重苦しい疑惑を解こうと努める、彼は墮落した第二のゴリャートキン氏に、従って腐敗した官吏社会に全力をあげて抵抗する、素手で戦かうゴリャートキン氏はついに力尽きた。彼の発狂は、彼がなし得た限りの最も暗い抗議であった。

IV. 主人公の内面的世界

然し、ゴリャートキン氏を発狂に追詰めた前述の腐敗した社会関係は、個々の場面を通して推察し得るだけで、明瞭に表現されているとは云えない。ドブロリューボフは、「もっと立派に仕上げたならばゴリャートキン氏からは、特殊な奇妙な存在ではなくて、その多くの特徴が我々の多くの者に見出される所のタイプが現れたであろう。」²⁾と語っている。

では、何故ゴリャートキン氏が特殊な奇妙な存在となり、まったく典型性を失ったのであろうか？ それは、フリードレンデルが指摘しているように、「ゴリャートキンの精神的苦悩・心理的分裂・ファンタスティックな幻覚の描写が、現実的な生活の基盤・主人公の体験の社会的意義の分析よりも、遙かに大きな位置を小説の中で占めており、しばしばこの描写がドストエフスキーにとって自己目的となっている」³⁾からである、と云えよう。作者は、次第に精神錯乱の深みにおちいってゆく主人公の「皮膚の中に移り住み」⁴⁾彼の苦悩・分裂・幻覚を「全く主人公の言語により、主人公の観念を通じて」⁴⁾物語ろうと努める。従って、作者の関心は、主人公をとりまき彼の生活を条件づける所の社会関係から遠ざかり、もっぱら主人公の内面的世界に集中される。かくして、作者はゴリャートキン氏の心の中をくまなく点検し、彼を破滅させた原因を、周囲の世界よりもむしろ、彼自身の心の奥底に内在する「第二の自我」に求める。この点を作品そのものに即して究明してみよう。

私は前に、ゴリャートキン氏が現実においては卑劣な人間を憎み軽蔑していたことについて述べて置いた。然し、彼の「第二の自我」がほしいままに振舞う空想の世界においては、そうではなかった。彼は卑劣で醜悪なものを激しく憎んだ、だがそれと同時に、彼の心の奥底には、卑劣で醜悪なものへの憧れをかき立てる「第二の自我」がひそんでいた。彼の性格にそぐわない周囲の現実が彼の上に益々重くのしかかってくるにつれて、この「第二の自我」も、彼の空想の中で益々ひんぱんに頭をもたげ、次第に第二のゴリャートキン氏の成長を促進していった。

1) Н. А. Добролюбов, «Забитые люди», стр. 75.

2) Там же, стр. 78.

3) Г. М. Фридендер, «Достоевский», стр. 22.

4) В. Г. Белинский, «Петербургский сборник», стр. 29.

作者は、第二のゴリャートキン氏が現実の独立的存在として主人公の前に姿を現した直後の様子を、次のように描いている。——「見知らぬ男は、黙ったまま腹立たしげに踵を返して、ゴリャートキン氏のために潰した二秒間を取り戻そうとでもするように、急ぎ足で先へ歩き出した。ゴリャートキン氏はどうかというと、体じゅうの筋がことごとくふるえ出し膝頭ががっくりして力抜けがし、呻き声をあげて歩道の杭に坐りこんでしまった。だが、彼がこれ程の惑乱におちいったのには、本当にわけがあったのだ。ほかでもない、この見知らぬ男が、今では何だが知人のように思われてきたのである。それだけならまだ何でもない。だが、彼は今この男が分ったのである。殆ど完全に分ったのである。彼はしばしばこの男に会った、いつか会ったことがある、否ついこの間会ったことすらあるのだ。一体それはどこだったろう？ 本当に昨日のことじゃなかったろうか？ 然しながら、ゴリャートキン氏がしばしば彼に会ったとしても、それもやはり大した問題ではない。それに、この男には特にどうという所など殆どないのだ。——はじめ一目見た時も、格別注意をひくような所は全然なかった。云ってみれば、みんなと同じような普通の人間で、きちんとした人間が皆そうであるように、勿論きちんとした人間で、何やかやちょっとした美点、いや、ひょっとしたらかなり立派な美点さえ持っているかもしれない。——要するに、れっきとした一人前の人間なのである。ゴリャートキン氏は、この男に対して、憎悪も敵意も抱いてないばかりか、恨みの情などこれぼっちも感じていなかった。それどころか、むしろその反対であるようにさえ思われるのであった。——にも拘らず(これこそ最も肝要な点なのだ)、にも拘らず、この世のいかなる宝に換えても、この男には会いたくない、殊にたとえば、今夜のような状況では、尚更会いたくないのであった。更に一步すすめて云えば、ゴリャートキン氏はこの男を完全に知っているのであって、姓名までも承知しているのだが、しかも、どんなことがあろうと、くり返して云うが、この世のいかなる宝に換えても、彼の名をあげたくなかったに相違ない。彼の名がかくかくであり、父称がかくかくである、姓がかくかくである、などということを、絶対に認めたくなかったに相違ない。」¹⁾(傍点筆者) この男は、ゴリャートキン氏にとって全く赤の他人でない所かきわめて彼に縁の深い存在であった。ゴリャートキン氏は、「彼の空想の中に現れてくる一切の卑劣さと俗世間的な抜目なさ、一切の醜悪で成功的なものを集積して」²⁾、空想の中に第二の自分を作り出し、これとなじみを重ねていたのである。従って、彼がしばしばこの男に会い、つい昨日会ったことがあるとしても別に不思議ではない。「ボロ屑にされたゴリャートキン氏の心の中に、どこか奥の方のボロのひだの中に保たれている人間的なものの残滓」が、「この世のいかなる宝に換えてもこの男には会いたくない」という嫌悪感をかき立てるのではあるが、同時に彼は、心の奥底から頭をもたげてくる第二の自我に抵抗できない。空想が度重なり白熱化してゆくにつれて、彼はこの男が憎めなくなる、なじみを重ねれば重ねる程、むしろ反対に愛情が増し、自分もこのような男になりたいと願う。彼は、現実においてはこのような男を憎み、空想の中ではこの男を愛してきた。

然し、彼の貧弱な「理性の蝶番」が外れると同時に、彼の意識の中で現実と空想を分け

1) Дос., Соб. соч. стр. 254.

2) Н. А. Добролюбов, «Забитые люди», стр. 76.

隔てていた壁が崩れ落ちた、もはや障壁のないこの現実と空想の混淆した世界——ファンタスティックな幻覚の世界——の中で、第二のゴリャートキン氏は始めて客観的な現実的存在となり得たのである。かくして、主人公が「二つに割れ」、二人のゴリャートキンが全く同時に共存するに及んで、主人公の地獄の苦しみが始まる。彼の空想の中で、官吏社会を縦横に泳ぎ廻り、無敵の活躍を続けていた第二のゴリャートキン氏が、今やうつつに主人公の前に立ちほだかり、彼を押しつけてその「勤務上・社会上の地位」を奪い取り、彼を官吏社会からしめ出そうと謀っているのだ。主人公は、自己の地位と体面を保つために必死の抵抗を開始する。然し相手は、官吏社会で成功するための資質に何一つ欠けていなかった、無能無力なゴリャートキン氏など物の数でもない。第二のゴリャートキン氏は、或いは、主人公が浄書した書類をぬけぬけと欺し取り、それによって閣下のおほめにあずかったり、或いは、自分がゴリャートキン氏に瓜二つというほど似ているのを利用して、料理屋で自分の食べた饅頭の代金を主人公に払わせたり、或いは、衆人環視の真ただ中で主人公の頬っぺたをつまんでみせたりする。

これら一連の屈辱的な敗北によって、主人公の怒と苦悩はいやましにつのる。彼は、決定的な挑戦状を第二のゴリャートキン氏につきつける、——「貴下かもしくは小生か、いずれか一人——我等兩人の共存は不可能に御座候……親友として交る用意も有之候へ共、拳銃に対する覚悟も有する次第に候。」¹⁾ 勿論、第二のゴリャートキン氏は、これ位の最後通牒にはびくともしない。ゴリャートキン氏は、自分の一切の不幸の原因である第二のゴリャートキン氏がこの世から消え失せればよいと願う。——「まあ、今かりに魔法使がやってきて、いや、お上の命令であってもかまわない。——おい、ゴリャートキン、右手の指を一本切って出せ、そうすれば、お前の勘定は皆済ということにして、第二のゴリャートキンはないものにしてやる、そしてお前は幸福な身の上になれるのだ、だが指一本だけはなくなるんだぞ、ともしこんな風に云ったら、——俺は指一本切って差し出したろう、必ず切って渡したに違いない、眉一つ動かさずに渡したに違いない。」²⁾——然し、既に彼が理性を喪失し、現実と空想のけじめがつかなくなった以上、たとえ「指一本切って渡した」にしても、彼にとって第二のゴリャートキン氏は動かし難い客観的実在であった。

この手ごわい敵に対する必死の抵抗の中で、ゴリャートキン氏は、彼自身でさえ思いもかけなかった奇妙な行動に走る。——役所で大勢の同僚達が見ている目の前で、「第二のゴリャートキン氏は、今まで自分の一番古い友達に気づくいとまもなかったのだが、恐らく間違だったのであろう、いきなり第一のゴリャートキン氏に手を差し出した。おそらく、これも同様に間違だったのだらう、我が主人公は、下劣な第二のゴリャートキン氏に十分気がついていたにも拘らず、全く思いがけなく、彼に差し出された手をむさぼるように掴んで、固く固く握りしめた、それは深い愛情をこめた握手であった、それは何かしら奇妙な、思いがけない、心の激動をこめた握手であった、何かしら涙ぐましい感情をこめた握手であった。我が主人公は、下劣な敵の最初の行動に欺かれたのか、それともどうしてよいか途方にくれたのか、或いは又、心の奥で我が身の頼りなさをつくづくと感じ意識した

1) Дос., Соб. соч. стр. 319.

2) Там же, стр. 294-295,

《分身》について

のか、——そのへんは何とも云いにくい。だが、第一のゴリャートキン氏が、気の確かな状態で、自分の自由意志から、証人達の見ている前で、己れの不倶戴天の敵とよんでいる男の手を、厳肅に握ったということは、疑のない事実である。¹⁾——不倶戴天の敵との握手、しかも一種名状しがたい感動をこめた握手、——この奇怪な行為の中に、ゴリャートキン氏の意識下の世界が浮び上ってくる。彼は長い間、孤独の空想の中で自己の「分身」をつちかい且つ愛してきた、そして今や、憎むべき当面の敵となった男に対するいとほしい愛情の念が、遠い追憶の霧を通して、意識の澱りの底から甦ってきたのである。

かくして、意識下の世界が行為となって現れ、思いもかけず第二のゴリャートキン氏を承認してからは、主人公は目に見えない糸にあやつられて憎むべき敵に引きよせられてゆく。彼は憎悪に燃えながらも、同時に第二のゴリャートキン氏と妥協し、彼と和解したいと願う、——「一体どうして、あいつは上の方にうまく取り入りやがるのか、一つ知りたいものだな。智恵もなければ、しっかりした性根もなく、教育もなければ、繊細な感情もないのに、あのペテン師野郎の運のいいこと！ ああ、何てことだ！ どうしてああも早くとんとん拍子にゆくんだろう、みんなの気に入られるんだろう、考えても不思議なぐらいだ！ あいつは出世するぞ、誓って云うが、えらく出世するぞ、大した所まで昇ってゆくに違いない、——運のいいペテン師め！ それに奴は、一体何をみんなに耳打していやがるのか、こいつもどうか知りたいものだな。あの連中みんなとどんな秘密を計画してやがるのだろう、どんな内緒話をしてやがるのだろう？ ああ、何てことだ！ 俺もどうかしてうまく、その…やつらと少しばかり…一つあいつにこれこれしかじかと頼み込んで見るかな…かよようかよようで、自分はもう今後あんなことはしない、自分が悪かった、今の時代では若い者が勤務につくのは当然だ、自分は現在の後ろ暗い立場を気につけないことにする。——こんな風に云ったらどうだろう！ 自分は何かの方法で抗議するようなこともしない、何もかも辛棒強く、おとなしく我慢しますから、——こう云ったらどんなものだろう！ 本当にこんな風にやって見るかな？」²⁾——かくして、ゴリャートキン氏は現実的な和解の道に踏み切った。然し、第二のゴリャートキン氏は、主人公の差し伸べた和解の手を情容赦もなく打ち払ってしまう。

一切の抵抗が打ち砕かれ、和解の試みさえ全く問題にされなくなった時、主人公は、一步一步譲歩を重ねながら、妥協の坂道を転がり落ちてゆく、——「僕は決して君の敵だったことなんかありません、あれはよこしまな連中が、僕のことです。不当なでっちあげをやったんです。」³⁾——「ヤーコフ・ペトローヴィチ、僕は偽りの羞恥心をかなぐりすてて、自分が思い違いをしておりましたと大胆に云うことが出来ます、それを打ち明けるのが、むしろ愉快なぐらいです。あなたは賢明でその上高潔な人ですから、ちゃんと分っていただけでしょう。僕は羞恥心を、偽りの羞恥心をかなぐりすてて、それを告白する用意があります。」⁴⁾——「ヤーコフ・ペトローヴィチ、僕は思い違いをしていたのです…あの不幸な手紙の中でも、やっぱり思い違いをしていたのです、今それがはっきり分りました。ヤーコ

1) Там же, стр. 328.

2) Там же, стр. 334-335.

3) Там же, стр. 337.

4) Там же, стр. 340.

フ・ペトローヴィチ、僕はあなたを見てると良心がとがめる、と云ってもあなたは信じてくれないでしょうね……あの手紙を僕に返して下さい、あなたの見る目の前で引き裂いてしまいますから、ヤーコフ・ペトローヴィチ、それとも、それがどうしても出来なければ、願だからあれを逆に読んで下さい。——すっかり逆に、と云うのは、友情をもってわざと僕の手紙の言葉全部に反対の意味をつけながら読んでいただきたいのです。僕は思い違いをしていました。赦して下さい、ヤーコフ・ペトローヴィチ、僕は本当に……悲しむべき思い違いをしていたのです。ヤーコフ・ペトローヴィチ。」¹⁾——かくして、ゴリャートキン氏が妥協の道を行き尽し、一切を譲歩し尽した時、彼は第二のゴリャートキン氏に無条件で屈服せざるを得なくなる。

ゴリャートキン氏の悲劇が開始されたオルスーフイ・イワーノヴィチ家では、今しも大勢の人々が、主人公を狂人病院へ連れ去る馬車の到着を待ち兼ねている。ただゴリャートキン氏だけが、このことを知らない、然し、重苦しい物思に心悶えながら、彼は目前に迫った己が身の破滅をはっきり予感する、彼は激しい絶望にかられて、第二のゴリャートキン氏に救を求める、——「あたりを見廻すと、自分のそばに第二のゴリャートキン氏がいるのに心づいた。彼の手をとって、脇の方へ連れて行かなければならないぞと感じて、ゴリャートキン氏は、第二のヤーコフ・ペトローヴィチに、今後どんなことが起ろうとも自分に力を貸してほしい、危急の場合には自分を見棄てないでくれと、しきりに折入って頼み始めた。」²⁾——だが、このような哀願が何になろう！四頭の黒馬をつけた箱馬車が車寄せに乗りつける。第二のゴリャートキン氏は、「冷たい水を浴せられた小猫のようにふるえている」³⁾主人公を、馬車の中に助け乗せる。「薪も、灯も、召使も附いている官舎」⁴⁾を目指して、馬車は暗闇の中を駈けてゆく。一番後までついて来た第二のゴリャートキン氏も、まったく姿を消してしまった。ゴリャートキン氏のはかない最後の希望が消え失せ、彼が自己の「分身」に完全に屈服した今、主人公は決定的に破滅したのである。

ここで我々が観察したように、主人公は自己の「分身」を激しく憎悪し、彼と必死の斗争を行いながら、しかも尚、この憎悪の底にひそむ愛情故に彼を憎みきれなかった。ゴリャートキン氏は、彼の心の奥底に不可避免的に内在する「悪なるもの」に抵抗できずに、一步一步譲歩を重ね、ついに完全に屈服したのである。

む す び

我々は、ゴリャートキン氏の性格・彼の社会的地位・彼の内面的世界を考察し、これら三つのモメントの各々がそれぞれに深い矛盾をはらんでいること、ゴリャートキン氏の悲劇がこれら三つのモメント全体によって引き起されたことを理解し得た。しかも、作者が第三のモメントに特に重点を置いていることも、明瞭に理解し得た。

《分身》において、ドストエフスキーは、ゴリャートキン氏の苦悩と分裂を彼のファンタ

1) Там же, стр. 340-341.

2) Там же, стр. 371.

3) Там же, стр. 374.

4) Там же, стр. 375.

《分身》について

スチックな幻覚を通してなまなましく描き、彼の内面的世界を浮彫りにしてゆく。かくして作者は、人間性そのものの矛盾を、社会関係との関連においてというよりは、むしろ主人公個人の枠内においてもっぱら分析し追求している。後年ドストエフスキーは、「悪は、人間性の中に、社会主義の医者達が考えているよりも、もっと深くひそんでいて、どんな社会機構にあっても、悪を免れ得ないし、人間の心は依然として同じままであり、異常性と罪悪は、人間の心そのものから出てくるものであることは、全く明々白々である。」¹⁾と述べているが、ドストエフスキーのこのような人間観——社会関係とは無関係に本源的に人間の心に内在する「悪」の承認——は、《分身》において始めて明確に表現されたと云い得る。ドストエフスキーにあっては、人間性そのものの矛盾——人間の二重性——は、人間における悪の不可避性の必然的結果なのである。

私は前に、ゴリャートキンという名前の由来が、彼が裸の人間——まったく無防備な人間であることから出ているということについて、触れておいた。ここでは、これについて今一つの推測——ドストエフスキーは、この名前によって、もし人間の心を裸にし、その心の中をそっくり裏返してみたら、必ず第二の自我がひそんでいるのだという意味を持たせたのだ——という推測も、可能になるであろう。

1) Ф. М. Достоевский, «Дневник писателя за 1877 год», Берлин, 1922, стр. 320.